

# 徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu

元静岡県立大学非常勤講師  
郷土歴史研究者

黒澤 脩 氏

Osamu Kurosawa



経歴

昭和21年(1946)生まれ。静岡市教育委員会事務局参与を最後に退職。現在は静岡市教育委員会のスペシャリスト派遣事業で、小中学生の「郷土学習」を対象とした出前講座を通じ、「静岡と日本文化」を大切にする心を子供たちに伝えている。

## 駿府城でヨーロッパ諸国との外交を展開した家康

### 大航海時代の洗礼を受けた家康

イタリア・スペイン・ポルトガルは15世紀、新世界へ向かつて大海原に船出した。大航海時代(Golden Age of Exploration)の幕開けである。それがコロンブスのアメリカ大陸発見(1492)、バスコダガマのインド航路発見(1498)である。この波紋が日本に到着するのは50年後、ポルトガル人の種子島漂着であった。徳川家康誕生の翌年であり、続いて家康7歳の時、キリスト教が伝来した。日本の大航海時代の頂点は、家康の駿府大御所時代であった。この間、家康は技術革新を高め、「鉄砲生産・銀山開発は世界のレベルを超えていた」とウィリアム・アダムスは記録に残した。

### 徳川家康の最初の国際外交

家康最初の国際外交は慶長12年(1607)、経緯を説明する「物の世界遺産」にも匹敵すると考えられる。

### 皇帝と呼ばれた駿府の家康

駿府で家康に接した外国使節・宣教師・商人らは、家康を「皇帝・日本皇帝・日本国王・内府様・將軍・大將軍・国王・大王」と最大級の敬意を持って呼んでいたことが記録に鮮明に残されている。大御所家康の存在は、想像を絶するスケールで海外にもその名が光り輝いていたのである。

慶長14年5月30日、オランダ国王使節が来日した。オランダが、幕府公式の外交記録(「異国日記」)に記載されたのはこの時からである。使節の中心人物は、アブラハム・ニコラース・ポイクで、和暦6月26日に平戸を出発。共和国連邦総督オランニエ公の親書を携えて駿府城へ向かった。駿府城で締結された日蘭外交交渉で、家康は正式に平戸にオランダ商館の設置を許した。ヨーロッパ

朝鮮王朝との国交回復であった。秀吉の朝鮮侵略により混乱した日朝関係修復であり、家康は朝鮮通信使を日本に招待し善隣友好外交を行った。これぞ世界外交史の中で、大きく評価される出来事であった。

続いてスペインの遭難船を救助し、乗組員をアダムズ造船の日本最初の帆船でメキシコに送り届けた。慶長15年(1610)のことである。「駿府大御所派墨使節」として記憶すべき世界的快挙である。田中勝介が使節団長で、以下22人の日本人が航海技術を学びながらアカプルコまでの航海に成功したのである。

これに感謝したスペイン国王は、ビスカイノ答礼大使を駿府に派遣し、友好の証しとして国王の時計を家康に贈呈した。これが久能山東照宮に現存する重文の時計で、駿府と大航海時代の

パの国と日本が、はじめて実施した外交交渉である。ポイクは、「駿府旅行記」を著して駿府城で活躍するアダムスにも言及している。

### イギリス国王使節、駿府へ

イギリス使節の来日は、慶長18年(1613)でオランダより4年後に駿府に来た。立役者はアダムスで、「日本に来た最初のイギリス人」(P.G.ロジャーズ著)に詳しく記されている。この時、来日したイギリス船を目撃したスペイン商人アビラ・ヒロンは、「イギリス国王からは、昨年(1613)年、日本の国王(家康)への使節を乗せたまことに美しい船が来航した」(「日本王国記」と興奮を交えて記録した。スペインに代わって世界に台頭したイギリスの国威を暗示したのである。

使節が英国に持ち帰った家康の国書は、オックスフォード大学日本研究図書館に現存し、筆者は駿府城天守閣調査の出張で拝見させて戴いた。



「南蛮船駿河湾来航図屏風」(部分、九州国立博物館所蔵) 慶長12年(1607)、清見寺に逗留していた朝鮮通信使一行が駿河湾に停泊していた南蛮船についての記録を残しており、本図は、その様子を描いたものと推定されています。(写真撮影：山崎信一氏、写真提供：九州国立博物館)

## 私の一文字

黒澤脩さんが選ぶ  
徳川家康公を表現する一文字。

家康は、優れた人物から耳学問で最高の教養を身に付けていた。

# 聴

著書のご紹介



「ジバングの王様 徳川家康」  
静岡新聞社 1575円(税込)

「日本国(ジバング)の王様」と呼ばれ、ヨーロッパ諸国を相手に華麗なる国際外交を展開した大御所・家康。駿府・静岡を舞台に活躍した真の姿に迫る。